

今回から「仕事で一番大切にしたい 31 の言葉」という本からです

「一番以外はビリ」が私の信念。二番でいいなんていう考え方は駄目です

（日本電産創業者 守永重信）

「世界一になる理由は何かあるんでしょうか？二番じゃダメなんですか？」。ご存知、民主党のマドンナ、蓮舫議員が事業仕分け（行政刷新会議）で発した名セリフである。「『一番以外はビリ』が私の信念。二番でいいなんていう考え方は駄目なんです。日本電産はモーター市場で世界一を目指す。それも、断トツの世界一を」。こう公言してはなばからないのが社長の守永重信である。2010 年（平成 20 年）2 月、バンクーバー冬季五輪のスピードスケート男子 500 メートルで、日本電産サンキョーに所属する長島圭一郎選手が銀、加藤条治選手が銅メダルを獲得した。会社と守永個人が折半で、長島選手に 1000 万円、加藤選手に 600 万円の報奨金を贈ったが、「世界一である金メダルでなかったのは残念」と悔しがった。守永は世界一にこだわる。「とにかく一番にならんといかん」と走り続けてきた。創業 30 周年の 2003 年（平成 15 年）3 月に建てた本社ビルは 22 階建て、100.6 メートルである。宿敵と考えている京セラの本社ビルを抜き、京都で一番高い建物になった。飛行機の座席番号もいつも一番を指定。昔、通っていた銭湯の脱衣ボックスも必ず一番だった。典型的なモーレツ経営者である。弱小企業が大企業に勝つ方法は、たった一つしかないからだ。ヒト、モノ、カネどれをとっても大企業に勝てる要素はない。平等に与えられているのは一日 24 時間だけだ。競争相手の 2 倍働く。相手のセールスマンが一回行くところを二回行く。ライバルが 3 ヶ月で仕上げますと言ったら、1 ヶ月半でやる。絶対にギブアップしない。そんな社員を守永は求め続けている。だから、新入社員の採用は、学校の成績や出身大学では決めない。採用基準は、大声テスト、早めし、便所掃除。声が大きくめしを食うのが早くて、丁寧に便所掃除するヤツを採った。採用は留年経験者に限ると決めた年もある。早めし試験はこうだ。昼食付きの試験案内で釣った学生を一部屋に押し込め、めしを食わす。早く済ませて出てきた者から順番に採用した。ゆっくり食事を終えた学生が「もう試験は終わりです」と言われて、「バカにするな」と怒って帰ったという逸話が残っている。

日本電産は、素手で便器を掃除させる会社として有名だ。新入社員はもとより、M&A（合併・買収）で手に入れた企業の社員も例外ではない。男女問わず、最初の 1 年間は始業よりも早く来て、便所掃除をやらせる。守永は「我が社の経営理念」と題した講演で、こう語っている。〈同僚や部下が素手で掃除していると思うと、自ずからきれいに使うようになる。便所がきれいになると、他のところもきれいなる。汚れ仕事をいとわず、他人を思いやる気持ちを植え付ける。（中略）不満のある社員とは 3 時間でも 5 時間でも、繰り返し、本人が納得するまで話し合う。話の基本は、この会社は社長のモノではなく、みんなのモノであることを社員一人ひとりにわからせ、“やとわれ根性”をなくすことにある〉最も働くべきは、経営陣である。これが守永のポリシーだ。朝 5 時 50 分に起き、6 時 50 分に出社。帰りは 11 時を過ぎる。元旦以外は土日祝日を含むすべて仕事に捧げる。役員会や常務会は土曜、日曜開催だ。タバコもお酒もやらない。もちろんゴルフなど多くの時間を浪費するスポーツとは無縁だ。仕事がすべてなのである。唯一の休みの元旦も 1988 年（昭和 63 年）株式上場して以来、毎年、元旦の朝から自宅で書き初めをする。そして、その後九頭龍大社に初詣に出かける。1978 年（昭和 53 年）に倒産しかけた際、苦しいときの神頼みで神主に占ってもらった。来年の節分から運命が変わるので経営を継続するよにとのことだった。翌年の節分から大量の注文がはいり、倒産の危機を乗り越えた以来、元旦でなく、毎月欠かさず参拝している。

守永氏の会社の「我が社の経営理念」とは何と云ってますか？

（